

# 代名動詞について

佐藤房吉

## I. 再帰性

代名動詞は、常に、主語と人称、数を同じくする目的格代名詞（3人称では *se*）を伴っていることにより、形態的には、容易にそれと識別されるが、そこに見られる代名詞がどのような機能を担っているのか、換言すれば、代名動詞の本質は何であるのかを分析しようとする、様々な問題に逢着する。なかでも主要なものは、代名動詞と「再帰性」の問題であろう。

BRUNOT は、再帰性を定義して、「もし、主語によってなされる行為が主語の外にある生物 (*être*)、無生物 (*chose*)、観念 (*idée*) に及ぶのではなく、主語自身に立ち帰る時、行為は再帰している」(p. 327) とし、「たとえば、*madame s'habille*... において、衣服を着せるという行為は彼女によってなされ、衣服を着せられる人物もまた彼女であって、主語と目的語とは同一なのである」(ibid.) と分析している。

そして BRUNOT は、この論理的な、換言すれば、他動詞とその目的語との関係に還元しうる再帰性の有無に拠って、形態的には同一の動詞を、「再帰動詞」(*se voir*) と「代名動詞」(*se repentir, s'en aller*) とに二分し、「代名動詞は再帰動詞とまったく同一の形態を有するが、その意味においては明瞭に異なる」(p. 297) とした。

しかし、こうした論理的再帰性乃至再帰的他動性の有無の判定は、本質的に、きわめて不安定にならざるをえない性質のものであって、人は、再帰性の有無を判定しようとして、実は、その度合を判定しているにすぎないのである。

なぜならば、再帰的他動性は、代名動詞の基底動詞が他動詞——「主語から発してある目的語に及ぶ行為を示す動詞」(GREVISSE, §1344, p. 672)——であることを論理的な前提としているのに、ある動詞が自動詞であるか他動詞であるかは、本質的かつ実質的に、コンテキストによってしか定まらない (*passer des années/des années passent*) 上に、ある動詞にその代名形化というコンテキストを与えた場合、その動詞が他動詞としてそこにあるか否かの判定は、必ずし

も明瞭ではない (*des années passent/des années se passent, ceffe étoffe ne lave pas/cette étoffe ne se lave pas*, cf. MAUGER, p. 292) からである。

従って、他動性を、主語の行為が「主語の外にある」ものに及ぶ関係とし、これに「再帰性」を与えたものが代名動詞の本質であると定義する時、そこで再帰的他動性の有無の判定は、実質的には、その——しばしば微妙な——度合の判定に変質せざるをえなくなり、およそ「度合」の問題が常にそうであるように、すべては、「コンテクストとそれを解釈する思考の論理」(cf. DE BOER, § 13, p. 15) に、換言すれば、多くその人の言語感情に左右されることになるのである。

事実、BRUNOT 自身、1.a.—4.a. は再帰的であるが、1.b.—4.b. は非再帰的であるとしている (p. 297)。

1. a. La fillette *se regarda* dans la glace et *se trouva* changée.
- b. Après cet événement, sa fortune *se trouva* changée.
2. a. Cet homme *s'est élevé* par son propre mérite.
- b. La température *s'est* beaucoup *élevée* hier.
3. a. Cet aveugle ne peut pas *se conduire*.
- b. Cet homme *s'est* mal *conduit* avec moi.
4. a. Une occasion *se présente*.
- b. Je *me présente* à vous.

そして BRUNOT はさらに、そこに度合の差をも認め、たとえば、1. a. については、「容易に再帰性を認めうる」が、2. a. については、これを「再帰的と見做しうる」ものとしている (ibid.)。

しかし、「思考の論理」乃至言語感情が、BRUNOT と異なれば、解釈乃至分析もまた、直ちに、BRUNOT とは異なったものになるであろう。

たとえば、VINAY-DARBELNET は、5 を「再帰的」[=*dress himself*] としながら、6 は「力の弱まった再帰形」[=*dressed*] とし (p. 134)、さらに CRESSOT は、7 にも再帰性を感じとって、ここでは「静態的な事実が、動態的に捉えられている」(p. 158) とする。

5. Cet enfant ne *s'habille* pas encore tout seul.
6. Il se leva et *s'habilla*.
7. Cette montagne *s'élève* à 3 000 mètres.

努力しても、自分で衣服を身につけえない子供について用いられた *s'habiller*

には、より明示的な再帰的他動性を、ほとんど無自覚的、機械的な行為としてそれを行う大人については、その「弱まり」を見ることは論理の自然であるが、一方、屹立する山容を前にして、その内部にあって、己を外へ押し上げている「再帰的他動性」を感じることもまた、一つの言語感情であろう。

そして、それならば、CRESSOT を援用するまでもなく、たとえば、2. b. の *s'élever* を *la température s'élève visiblement* というコンテクストのなかに置き直し、あるいは、1. b. の *sa fortune se trouva changée* と 4. a. の *une occasion se présente* に共通しうる言語外的な要素として、任意に、あるドラマティックな状況の変化を想定すれば、これらのいずれの代名動詞をも、ひとしく再帰的と解しうるであろう。さらに、4. b. の *se présenter* は、ほとんど意志的な努力を伴わない「自己紹介」としては非再帰的であるとしても、たとえば、よく知らない外国語を用い、特定の必要に迫られて、辛うじなしたせた *j'ai réussi à me présenter tant bien que mal* になれば、そこに見られる意志的努力という共通の事実によって、3. a. や 5 と同質、同程度の再帰性を感じることもできるであろう。

繰返して言えば、たとえ *se souvenir* や *s'en aller* のような事例を除外して考えることにしたとしても、再帰性、即ち、再帰的他動性の有無の問題は、実質的には、その度合の問題であり、その度合の強弱は、すべて度合の問題がそうであるように、「コンテクストとそれを解釈する思考の論理」の所産にすぎない。

そして、DE BOER が正しく指摘しているように、コンテクストを構成する要素として第一義的に重要なものは、「それぞれの語の意味そのもの」(p. 35) であるから、ある動詞の単純形を代名形に変えた段階で、即ち、語彙のレベルで、そこに一つの「コンテクスト」が構成され、当然の結果として、その段階ですでに、分析乃至解釈の不一致が生じることになるのである。

たとえば、*se promener* は、*Grammaire Larousse du XX<sup>e</sup> siècle* にあっては、「代名詞がその意味を失っている」(p. 315) 例であり、CRESSOT にとっても「おそらく分析不可能な代名動詞」(p. 158) であるが、BONNARD はこれを「再帰の意味 [*se/promener*] と語彙化された意味 [*se-promener*] の中間にある」(p. 150) と感じている。

またたとえば、*se nuire* は、WARTBURG-ZUMTHOR にあっては *se* を間接目的語とした他動詞であり (§ 351, p. 190) ながら、WAGNER-PINCHON にあっては、ここでの代名詞の機能は、「解釈の仕方はいかようであれ」という条件を付

した上で、「ともかく実質的 (positif) なもの」とされる (§328, p. 294)。ついでながら、WAGNER-PINCHON にあっては、「s'amuser, se plaire à, s'ennuyer, se distraire, etc. という動詞の場合にあっても、『本質的代名』動詞 (s'écrier, s'évanouir) の場合と同じく、[代名詞の] 機能はゼロである」(ibid., ibid.)。

そしてまた、DE BOER は、se tromper について、「ここでの被制辞 se は、人が誰かを tromper することもできるという事実」——即ち、基底動詞 tromper の他動性と、se/le tromper という代名詞の自立性乃至互換性の存在——「にもかかわらず、真の被制辞ではない。se tromper においては、人は何人をも、己自身をも欺いてはいないという意味において、所謂、行為が主語から外に向うという事実が存しないからである」 (§76, p. 57) と言う。

しかし、*Petit Robert* は、se tromper の語義として、最初に、commettre une erreur を与え、次に「再帰的意味」として se mentir を与え、それぞれの用例として、8, 9 を示している。

8. Se tromper est la rançon de penser. (ALAIN)

9. Et l'amour-propre engage à se tromper soi-même. (MOL.)

この二つの文を、*Petit Robert* の与えている語義に従って訳しわければ、8 は、「誤りを犯すことは、思考することに対して支払う代価である」であり、9 は、「自己愛というものは、人の心を誘って、己自身を欺かしめる」であろう。9 においては、soi-même の存在も、そこでの再帰性を明示しているかに見える。しかしここでもまた、問題の本質は、再帰性の有無そのものではなく、その度合であると考えることができる。

なぜならば、何かについて思考を進めてゆく過程で、人は、必然的に判断の誤りを犯すという事実乃至真実の指摘には、誤りを犯すまいとする意志的努力にもかかわらずということが、当然の前提として含まれており、ここでの se tromper は *se conduire à un jugement faux* に外ならないからであり、一方、自己愛、自尊心、あるいは、自惚れが、人をしてその実像とは異なる虚像を心に抱かしめると言う時、そこには、無自覚、無努力、安易な思考の過程をも見ることができ、ここで、se tromper=tromper soi-même であるとしても、それは、commettre une erreur sur soi, sur ce qu'on est réellement にひとしく、VINAY-DARBELNET が、(il se leva et) s'habilla に見たのと同じ「力の弱まった再帰形」を見ることも十分に可能だからである。

このように、再帰的他動性の有無を論ずることは、実は、その度合を論じて

いることに外ならず、度合は常に、その性質上、浮動性を免れえないものであるから、これに拠って代名動詞の全事例を——たとえば BRUNOT のように——分断的に二分することは有効ではないと思われる。しかし、このような二分法は、BRUNOT 以後、今日もなお引き継がれており、代名動詞は、その一方の事例にあっては、「再帰代名詞を目的補語とした直接他動詞 (*il se lave*)、あるいは、間接他動詞 (*il se nuit*) である」(WARTBURG-ZUMTHOR, § 351, p. 190) が、他方にあっては、「代名詞は、言わば、癒着しており、補語としてのいかなる統辞的機能をもとどめていない」(*ibid.*, § 352, p. 191) のであって、分析不可能な「一種の屈折小辞 (*particule flexionnelle*)」(GREVISSSE, § 1386, p. 693) なのである。

しかし、このような二分法は、すでに見たように、分析の実際において有効でありえないだけでなく、「用いられるべくして用いられたいいかなる小辞も虚辞ではありえない」(DAUZAT, p. 269)、あるいは、「一個の記号は、いかなる場合にも『虚』(*vide*) なるものとは見做しえず、記号はすべて、程度の差こそあれ、意味作用を担っている」(MOIGNET, p. 283) という原理に反するのみならず、DE BOER が正しく指摘している、より重要な原理、即ち、「いかなる統辞的要素にも、一次的機能 (*fonction primaire*)、換言すれば、ある特定の時代の用法としては、その要素が、常に、そして、それのみで、コンテクストのいかににかかわらず果している機能がある」(§ 41, p. 34) という原理にも反している。

そして、論理的因果関係に基く再帰性乃至再帰的他動性は、たとえば、*se mourir* や *s'en aller* のような型の動詞にはもちろん、(*amuser/*) *s'amuser*, (*passer/*) *se passer* のような動詞にあってさえ、これを求めがたい以上、再帰的他動性は代名動詞の「一次的機能」ではありえないであろう。

それは——たとえある種の事例にあっては、そのなかでの主要なものになりうるとしても(*se tuer en se tirant une balle dans la tête*)——「大部分の統辞的要素が」有している「一定数の二次的機能 (*fonctions secondaires*) 乃至『価値』(*valeurs*)」、即ち、「この統辞的要素が、言語的な、あるいは、言語外の諸他の要素と合した時に始めて可能な『意味作用』(*significations*)」(DE BOER, *ibid.*) の一つでしかないであろう。

そしてまた、「二次的機能」乃至「価値」とは、ある統辞的要素が、それ自身で「表現している [*exprimer*] のではなく、暗示 [*suggérer*] を助けているにすぎないすべての効果」(*ibid.*, § 258, p. 143) である以上、つまり、「文体的」

価値である以上、「一次的機能」という「文法的」価値は、これを、再帰性乃至再帰的他動性という、本来二次的な「価値」以外のところに求めなければならないことになるのである。

それにもかかわらず、たとえば、WAGNER-PINCHON は、代名動詞が「そのみで、常に、コンテクストのいかんにかかわらず果している」その「一次的機能」を求めることを断念して、「代名動詞のすべての用法に共通している基本的な意味作用上の特徴を求めても、それを発見することは不可能である」 (§ 328, p. 295) とし、その理由として、たとえば、「所謂『本質的代名動詞』は、対立する非代名形活用が存在しない以上、顧慮に値しないし、*avancer/s'avancer, reculer/se reculer, passer/se passer, ouvrir/s'ouvrir, plier/se plier* のように、対立形が存在する場合でも、単純形と有標形とを分つ意味的な差を、その用法の分析を通して把握することはできない」(ibid.) ことを指摘し、また、GREVISSE も、10 を引用しながら、「一般に、代名形の使用頻度が低い」ことを別とすれば、「代名形と非代名形との間に意味の差はない」 (§ 1388, n. 31, p. 694) としている。

10. Son cœur a trop souffert pour *guérir*, pour *se guérir* jamais. (Ac.)

しかし、CRESSOT が引用しているものに、次のような例がある。

11. J'ai vieilli. Je *me suis guéri* de ce mal ridicule. Il me faudrait plus justement écrire: *j'ai guéri*, pour ne pas laisser croire que l'application de ma volonté y fût de quelque poids. (G. DUHAMEL)

CRESSOT はこれに付注して、「ここでの代名形が暗示する内的能動性 (activité intérieure) のごときものが」DUHAMEL という作家の心によって「はつきりと感じとられている一例」(p. 158) としている。

たしかに、WAGNER-PINCHON や GREVISSE の指摘にもかかわらず、コンテクストは明瞭に、ここでの *se guérir* は、*guérir* の「自然治癒」に対して、「闘病という意志的行為の結果としての治癒」であることを示している。

CRESSOT はまた、同じ個所で、「ある内的トーン (note intérieure) をもたらすことのみを事としてと思われる分析不可能な代名動詞も存在する」こと——たとえば、「*s'évanouir, s'effondrer, それにおそらくは se promener*」——を指摘し、同じ理由によって、*manger* と *se nourrir de, voir* と *s'apercevoir de* とを対立させている。

そして、代名形化の本質は「再帰性 (réflexion) と相互性の有標化にある」(p. 225) と考える GOUGENHEIM も、「rire (de), jouer (de) という動詞にあっては、接合形再帰代名詞は、行為そのものではなく、主語の精神状態を示している」(ibid.) として、*il rit de son maître / il se rit de son maître, nous jouons du piano / nous nous jouons des difficultés* を挙げている。

CRESSOT は、内的能動性「のごときもの」、「ある」内的トーンと言うにとどめているが、「内的能動性」そのものは、これを、発生し、展開している事態が、言わば、内発的、自律的なものと捉えられている時 (cf. *cette montagne s'élève à 3 000 mètres*)、そのような事態の属性としての「動態」(dynamisme) —「運動」であり、「生成」であるもの——と考えることができるであろう。

そして、もしそう定義しうるならば、この「価値」は、CRESSOT や GOUGENHEIM の指摘する、一部特定の事例についてばかりではなく、論理的再帰性乃至再帰的他動性が、分析的に、抽出可能 (*se laver*) であれ、不可能 (*se souvenir*) であれ、ある程度可能 (*se promener*) であれ、すべての代名動詞に、常に、伴う「価値」であるように思われる。

そしてまた、常に暗示される「価値」であるならば、それは、そうした「価値」を伴う統辞的要素の「一次的機能」と、もっとも深く、ほとんど分ちがたく——たとえば、時制とその暗示するアスペクトのように——結びついているものでなければならない。

ここで、結論を先に言えば、代名動詞の「一次的機能」——代名動詞が、現代フランス語という「ある特定の時代の用法としては、それのみで、常に」果している機能——は、本来論理的な関係概念であり、行為をその対象へ向う方向運動においてしか見ようとしないう「他動性」——己の外にある対象に向う方向運動——の「再帰化」のなかにではなく、却って、己の内に徹した——「主語の精神の状態」——行為の場の閉鎖性 (*champ d'action clos*) とでも呼ぶべきものの有標化とその「アスペクト」としての「内的能動性」のなかに、これを求めることができるであろう。

「コンテクストとそれを解釈する思考の論理」によっては、程度の差こそあれ、再帰的他動性にも接近しうる (*se laver*) 「内的能動性」は、この、行為の場の閉鎖性の有標化を前提として始めて、かつ、そのことによって常に、暗示される「価値」である。

行為の場が「事行 (*procès*) の本質」を構成する要件の一つであることは、WAGNER-PINCHON の指摘するところでもある——「動詞が、状態、あるいは、

状態の変化を喚起している時、そうした状態の変化を蒙り、感じる人や物は、これを事行の『座』(siège) と考えることができる。そこでの人および事物は、事行に関与してはいるが、事行の動作主ではなく、その起る場所 (lieu) なのである」 (§ 238, p. 225)。

12. *Nous nous amusons.*
13. *Elle a maigri.*
14. *Je souffre.*

冒頭に代名動詞の例があらわれるのでもわかるとおり、これらの例に基いての限りであるならば、WAGNER-PINCHON の「座」の概念は、われわれの考えている、「内的能動性」を、言わば、その「アスペクト」とした場の閉鎖性の概念と一致し、12-14 において、行為の場はいずれも閉鎖的であり、12 と 13, 14 とを分つものは、場の閉鎖性の有標形／無標形という対立でしかない。

しかし、同じ WAGNER-PINCHON が、同じ個所で、「多くの場合、動作主と事行の座と動詞の主語とは一体化している」として 15-17 を、「事行の座が文中の補語によって示されている」として 18 を挙げる時、彼らの言う「座」は、われわれの考える場とは本質的に異なるものとなり、むしろ、「部位」(partie) と呼ぶにふさわしいものとなる。

15. *Mon crayon s'est cassé.*
16. *Son visage pâlit.*
17. *Le postillon attela les chevaux.*
18. *J'ai mal aux dents.*

たとえば 17 の場合、そこでの「馱者」が、WAGNER-PINCHON の定義の範囲内でも、はたして「座」でありうるかという疑義は措くとしても、それは、その明白な他動性の故に、場の閉鎖性とはまったく無縁であるからである。(15, 16, 18 について言えば、そこでの場は共通して閉鎖的であり、15 がその有標形、16, 18 がその無標形であることは、もはや言うまでもないであろう。)

われわれは、代名動詞の「一次的機能」を、「場の閉鎖性+内的能動性」の有標化であると定義しながら、これまで、場の閉鎖性そのものについては、暗示的にしか扱ってこなかった。ここでそれに言葉を与えるとすれば、それは、DE BOER が「中間態」(voix moyenne) を定義して語る次のような言葉に、もっとも近いものとなるであろう。



「個体 (individu) は、己自身のなかに、あるいは、己の存在の周辺に生じている、ある変化、ある運動、ある動き (agitation)——どこまでも己の身に限られているか、あるいは、己を取り巻く周囲と密接に関係しているある変化——を感じとることができる。それは、たとえば、*mouvoir, s'amuser, s'étonner, se réjouir de, le blé lève, se faire vieux, désarmer* (=《dépousser les armes》), etc. である」 (§ 100, p. 66)。

見らるるとおり、DE BOER にあっては、「態」(voix) とは、特定の語形ではなく、言語化以前の、そして、発生している事態に対する「個体」の関与の仕方に基づく、その「個体」の精神乃至感情の様態 (modalité) である。

そして、やや奇異な感を与える *désarmer* を別とすれば、取りあげられている行為乃至事態は、いずれも、閉鎖的な場の内部で展開しており、同時に、そのことが必然的に伴う「価値」としての「内的能動性」においても共通している。そして、この「価値」の度合の差は、場の閉鎖性の呈示の仕方における無標形／有標形という対立の所産である。この度合の差をも含む公式化を行えば、*le blé lève* = champ d'action clos non-marqué (+activité intérieure) であり、*s'amuser* = champ d'action clos marqué + activité intérieure であろう。

従って、DE BOER の言う「中間態」のすべてが代名動詞のなかにあるのではないが、代名動詞のすべては「中間態」のなかにある。

従ってまた、DE BOER が、「個体は、『現に行動している』(agissant) だけで、それ以上ではない己を感じる (*marcher, penser*) こともできるし、あるいはまた、誰かまたは何かに対して働きかけている己を感じることもできる (*blesser, nuire à, se regarder, douter de*)」 (§ 100, p. 66) と定義する「能動態」という感情の様態に対応させている *se regarder* は、われわれにとっては、当然、「中間態」に対応するものとなる。

なぜならば、*se regarder* が「個体」に体験せしめているものは、「己の存在の周辺に」、換言すれば、己の存在とその外なるものとの接点に生じている「ある運動」——たとえば、*se regarder dans la glace*——であるか、あるいは、「己自身のなかに」、「どこまでも己の身に限られている」「ある変化」——たとえば *se regarder comme le centre de l'univers*——であるからである。

そして、言うまでもなく、動詞の示す行為の場が、ひとしく外に向って閉じられたものではあっても、そしてまた、それがひとしく有標化されてはいても、「内的能動性」という「価値」をその「アスペクト」とした事態の展開される「部位」は、己の存在とその外なるものとの接点に位置するもの (*se laver*) に

始まって、どのようにでも深く「己自身のなか」に及びうる (se laver < se promener < s'amuser < se souvenir < se mourir)。

当然、「場の閉鎖性の有標化+内的能動性」という代名動詞の本質乃至「一次的機能」の典型的事例は、現行の分析がそれに抱っている再帰的他動性からはもっとも遠いところ (se souvenir, se mourir, etc.) にあることになる。ある代名動詞は、その「価値」乃至「アスペクト」において、再帰的他動性に近づくほど、より限界的事例 (se laver < se lever < s'amuser) となり、反対に、「内的能動性」の度合が大きいほど、より典型的な事例 (s'amuser < se souvenir < se mourir) となるのである。

そして、この意味では、「相互的代名動詞」(se battre l'un l'autre) は、場の閉鎖性と非閉鎖性との境界領域を埋める「過度的事例」——これなくしては、いかなる統辞法も存立しえない事例 (cf. DE BOER, § 39, p. 31.)——を構成し、s'acheter une voiture, se faire (laisser) photographier のような事例とともに、本質的には、「疑似代名動詞」(pseudo-pronominaux) と呼ぶにふさわしいものとなる。

すでに見たように、ひとしく閉鎖的な場内に発する事態であっても、その言語化にあたっては、原理的には、有標形、無標形のいずれにも向いうる。自動詞/他動詞という対立が、本質的かつ実質的には、結果の、あるいは、コンテキストの問題にすぎないこともその傍証となる。しかし、ここでもまた——たとえば接続法の使用に関する「規則」と同様——部分的には「文法的拘束」(il se lève / le blé lève) であり、部分的には話者の選択に委ねられる (des jours passent · se passent)。そして、「拘束」の領域と自由選択の領域の区画決定は、国民的言語感情 (s'habiller / dress himself · dress) でもあり、同一の国民的言語感情の時代による変化 (\*se penser / penser) でもある。

かつてのフランス語においては、無標形と有標形の自由選択の領域は大きく、人は、欲するならば、se dormir, se penser, se vouloir、さらには、s'apparaître, se dîner, se demeurer, etc. をも用いることができたし、今日、代名詞の機能が「分析不可能」であるにもかかわらず、有標形を用いることが「拘束」化している s'évanouir もまた、無標形 évanouir と共存していた (cf. GREVISSE, § 1391, Hist., p. 695)。そこでは、こうした代名形化は、場の閉鎖性の明示であるよりは、他動性の「再帰化」と、たとえば se dîner の存在がそれを示すように、広く主語の「関心」を示す「心性的与格」(datif éthique) の派生的用法との、結果的合流であったと考えられる。現行の分断的二分法と、二分

されたそれぞれに対する分析乃至解釈も、この「歴史」に拠っているのである。

事実、*Grammaire Larousse du XX<sup>e</sup> siècle* から GREVISSE に至るまで、再帰的他動性を求めがたい動詞については、「せいぜい言いうることは、若干の場合、代名詞の存在は行為に対する主語のある独特な参加を示しているということである」(*Gram. Lar.*, § 368, p. 315)、あるいは、「ここでの接合形代名詞は」、「単に、それも若干の場合に」、「行為に対する主語の独特な関心を示す役割を果たすにとどまる」(GREV., § 1386, p. 693) とされているからである。

しかし、DE BOER が正しく指摘しているように、ある統語的要素の「一次的機能」は、あくまでも、「ある特定の時代の用法」として捉えられねばならず、また、BRUNOT も言うように「歴史的な文法は」、「現代の用法が、どのようにして、それに先立つ用法から生じたのかを教え」はしても、「今日の言語の正しい現実に合致した枠組を提供できる文法ではない」(Introduction, p. XIII)。

そして今日もなお「残っている」ものに、*se mourir* がある。辞書によっては、これに「文学語」という言語レベル上の位置づけを与え (*Petit Robert*)、あるいは何等の注をも付していない (*Petit Larousse*)。しかし、仮に「文学語」であり、「アルカイック」であり、従ってその使用がさして一般的ではないとしても、そのことは、この形が、今日の代名動詞の本質の理論的考察において重要な意義を持ちえないということではない。後述する STEN-a の発見した一例にも見られるように、唯一の事例もまた、理論的にはきわめて重要でありうるからである。

*Mourir* のようにその語義において、すでに、場の閉鎖性を強く内包しているものの場合、その有標化乃至明示化は、心理的にはきわめて自然であり、それはたとえば、「分析不可能」な「冗語」(redondance) という貶下的な名でよりも、IMBS が、フランス語の本質的かつ全体的な特徴としている (cf. p. 22) 「一致」(accord) という頌名にふさわしいものであって、代名動詞の今日における本質を象徴している事例と考えることができる。

そして、*se dormir* や *se penser*、さらには *se dîner* という有標化の途が忘れられても、換言すれば、「心性的与格」と併立していた「再帰性」から場の閉鎖性の有標化へという言語感情の歴史的变化のなかでも、*se mourir* が今なお「残って」いるのは、一個の生命ある個体が、まさにその生を了えようとしているという事態の厳粛さの故に、「一致」によってより明示的になる、死に

抗う生命の「内的能動性」という「価値」が、今日の言語感情のなかにも、自然な、あるいは当然な、新しい己の座を見出しえたからであろう。

しかし、今日、辞書や文法家たちが、mourir / se mourir という対立のなかに見ているものは、もっぱら、後者の示す「持続」のアスペクトであり、辞書は、これに拠って、se mourir = être sur le point de mourir, être en train de mourir と定義する。

代名動詞とアスペクトについては、後に再び取りあげるとして、当面問題になっている限りにおいて言えば、「持続」のアスペクトは、有標化乃至代名形化されることによって創り出されるものではない。この同じアスペクトは、たとえば、*Petit Robert* から引用した次の三例のいずれにも感じられるからである。

19. *Madame se meurt, Madame est morte.* (BOSSUET)

20. *Au dehors le soleil se mourait.* (ZOLA)

21. *Le jour meurt.*

言うまでもなく、これらの例における「持続」のアスペクトは、時制としての現在は、その本質において、現に在る事態の体験的持続 (*durée vécue*) の、また、半過去は、過去に在った事態の持続的追体験 (*durée re-vécue*) の言語化であるからに外ならない。有標形化乃至代名形化は、無標のままに用いた場合でもコンテキストがすでに「暗示」している同じアスペクトを、いっそう強めているにすぎないのである。すでに行った公式化を繰返せば、mourir = champ d'action clos non-marqué (+activité intérieure) であるのに対して、se mourir = champ d'action clos marqué + activité intérieure なのである。代名動詞にあつては「内的能動性」という「アスペクト」は、ほとんど明示に近いまでに、強く暗示される。

事実、GOUGENHEIM は、「いかに僅かでも、主語がその蒙った行為に与ってあれば」、受動態に代って代名形が用いられることの例として、「本人が運転していたのではなく、単に乗り合せていただだけでも、il s'est tué en automobile」と言い、同様に、偶然海に落ちた誰かについても、浪に抗う努力が、主語の能動性を構成するが故に、il s'est noyé と言うのである」(pp. 226-227) としている。

一方、周知のとおり、se souvenir と共存して、il lui souvient という無人称形がある。そして、DE BOER は、「il me souvient が中間態であるとするのが正しいならば、je me souviens も、本質的には、もはやほとんど、能動

態ではない」 (§ 101, p. 67) とし、一方、CRESSOT は、現代フランス語においても、*il me souvient, il m'ennuie, etc.* と *je me souviens, je m'ennuie, etc.* との間を距てているものは、擬古調／現代調という差だけではなく、前者には、「代名形によって明示されている能動的態度と有効に対立しうる受動的態度がある」 (p. 159) として 22 を挙げている。

## 22. Vous ennuyait-il? — Jamais je ne m'ennuie. (MOLIÈRE)

CRESSOT によれば、「人称形には、決して物に倦むことがないという十分な気力の持主であることを自任している人物の反撥が見られる」。「価値」の分析は、CRESSOT の言うとおりでであろう。しかし、「一次的機能」の問題としてこの事例を捉え直せば、DE BOER の言う「中間態」の有標的言語化が代名動詞の「一次的機能」であると考えられるわけわけにとっては、*il me souvient, il m'ennuie* と *je me souviens, je m'ennuie* との関係は、DE BOER とは反対に、後者が「中間態」の言語化であるならば、前者もそれに準じたものとなるのでなければならない。そして、両者の間を分っているものは、前者に見られる内的能動性の欠如、CRESSOT の言う「受動的態度」であり、ひとしく場の閉鎖性の言語化ではあっても、代名動詞というその十全な有標化 (*se souvenir*) を、*champ d'action déterminément clos marqué + activité intérieure*, その無標的呈示 (*souffrir, le blé lève*) を、*champ d'action déterminément clos non-marqué (+ activité intérieure)*、とすれば、このような無人称形による呈示は、*champ d'action indéterminément clos marqué (- activité intérieure)*、であり (cf. *il fait du vent / le vent souffle*)、CRESSOT の言う「受動的態度」とは、「内的能動性」の無限小化に伴って派生的に暗示される「価値」なのである。

無人称化は、その以前に在る精神の様態の当然の結果として、「個体」の関与可能性を無限小化しており、場の閉鎖性を無限定的空間の規模において示す (*il pleut, il y a, il faut, etc.*)。もし関係する「個体」が明示されていればそれは、このように無限定的空間の規模において示された閉鎖的な場の内部において、そこに発生している事態のかかわる「部位」としてである (*il me faut, il me vient une idée, etc.*)。ついでながら、*il y a* にあっては、閉鎖的に捉えられた無限定的空間は、言わば、宇宙的規模においてそうなのであり、*il y a* が存在それ自体の絶対的呈示であるのも、そのことに由来していると考えられる。

もちろん、il y a もまた、関係する「部位」を排除するものではない (il y a dans ce pays· ici des gens qui ne veulent jamais accepter cela)。

最後に、代名動詞が代名動詞であるためには、場の閉鎖性が前提となることを示す、興味深い例を見てみよう。

それは、STEN-a がある推理小説のなかに発見し、用例としてはただの一例にすぎないが、それ自身で独立した事例を構成すると判断し、かつ、「唯一の事例もまた、理論的考察においては重要性を有しうる」(p. 325) という原理に拠って分析している次の例である。

23. — Tu as vu Aurore ?

Il me fit un signe affirmatif.

— Elle n'a pas été trop effrayée par ton arrivée ?

Michaud répondit d'une voix neutre :

— Non... elle a été surtout étonnée !

— Je la comprends, à sa place...

— A sa place, jura Michaud, *je ne m'aurais pas foutu* dehors en me traitant de cinglé.

(Michel COUSIN, *Des idées noires*)

周知のとおり、代名動詞の複合時制では、助動詞には être を用い、ここで avoir を用いるのは、「地方訛りであるか、または、民衆語形である」(BRUNOT, p. 331)。しかし、一見そうした言語レベルから生じた「誤用」を思わせる卑俗な語形 (foutre=jeter) の存在にもかかわらず、STEN-a の「思考の論理」が正しく見抜いたように、ここでの avoir は être に代って用いられたものではない。コンテキストがそれを明示しているのである。

殺人事件に巻き込まれた医師が、自分のアリバイを証明するために、犯行のあった時に自分が一緒にいた Madame Aurore VERNAY なる婦人の住所を教えて、友人の弁護士を夫人の許へ送る。弁護士がそこを訪ねみると、住所も氏名もその通りなのに、訪ねて行った先の夫人はまったくの別人であった。医師の相手であった女性は、氏名、住所を詐称していたのである。本物の Aurore は弁護士をすげなく追い帰した。23 の対話は、戻って来た弁護士とそれを迎えた医師との間のものである。

STEN-a の分析は、まず言語レベルにかかわる問題については、「弁護士と雖も、(親しい間柄では)、下品な言葉を使用することは十分にありうることだが、そのことと、avoir を用いて代名動詞を活用させることとは、まったく次元を異

にする」(p. 324)とする。その通りであろう。STEN-a は続けて、「くだんの文には、je-me という組合せの存在にもかかわらず、再帰性 (réflexivité) は存在しない。je と me とは、文字通り、二人の別々な人間をあらわしている。語り手が、自分自身を二人の人間に分割したのだと言ってすますのは当をえないであろう。第一それでは、avoir が用いられた理由を説明しきれないと思われる——je me suis demandé si... という形が存するからである。弁護士の意図は、まさしく、骨と肉とを具えた二人の人間が対決しているシーンを描き出すことであって、文意は明らかに、『もし私が彼女の立場だったとしても、私の立場にあった人間を外へ放り出したりはしなかつたらう』ということなのである」(ibid.) とする。

しかし、「文意は明らかに」STEN-a の言う通りであるとしても、その文法的分析には首肯しがたい。

ここで「avoir が用いられた理由を説明」するのに、「文字通り、二人の別々な人間」の存在を想定する必要はない。コンテキストが明示している通り、事は話者の想像にすぎず、その想像のなかで、「私」は、「彼女の立場にある己」と「私の立場にある己」とに分割されていることは疑問の余地のない事実である。ここでの問題の本質は、je と me とが、je-me という場の閉鎖性においてではなく、je/me という非閉鎖的な場において呈示されていることにある。従って、論理的意味としては、「自らに問う」であるにせよ、「不審に思う」であるにせよ、その文法的本質において、十全な場の閉鎖性を構成している je me suis demandé si... に見られる être の使用は、問題になっている avoir の使用の「理由を説明」する上では、有意性乃至関与性を有しえないのである。従ってまた、je m'aurais foutu は、je, me の併存にもかかわらず、その場の非閉鎖性の故に、「代名動詞」ではないのであって、場の閉鎖性が成立しえない限り、je, me の併存という形態的要件が整っても代名動詞ではないこともありうることの証左として、換言すれば、「代名動詞」であるためには、常に場の閉鎖性が前提になることの証左として、「唯一の事例」ながら「理論的考察においては重要性を有しうる」ものとなるのである。

GREVISSE によれば、古フランス語では、je me suis levé の意味をあらわすのに、sui levez, ai levé, m'ai levé, me suis levez のうちのいずれの形をも用いたが、je m'ai levé という行為の結果を示す、je suis levé の影響のもとに、je me suis levé が一般化した (§ 1533, Hist., p. 753)。

「己の身に限られているか、あるいは、己を取り巻く周囲と密接な関係を保つ

ているある変化」という「中間態」の有標的言語化である代名動詞が、現に在る事態を、その時の現実の一つの属性として示す être を助動詞とすることは、事態を、常に、ある内的現実の一つの属性として——「主語の精神の状態」(GOUGENHEIM)として——呈示するという、代名動詞の共時的乃至今日的な在りようから言っても、論理的かつ心理的必然性を有していると言うことができる。そして、同じ GREVISSE が、「しかし、民衆語においては、依然として、je m'ai levé という言い方もよく用いられている」(ibid.) と指摘する時、それは、本来、知的、分析的であるよりは、情動的、即物的であり、統辞的には、「冗語」を厭わぬ一方、「経済の法則」を好む、民衆的言語生活の反映と考えることができる。(cf. *nous s'en foutons, nous s'en allons, nous s'arrêtons, nous on s'amuse* — FREI, p. 147. また、MAUGER (§604, N.B., p. 292) に見られる非代名形化としての、*cette étoffe ne lave pas, volità des habits qui jamais ne brossent.*)

## II. 受動的代名動詞

WARTBURG-ZUMTHOR を例にとれば、「もし動詞の主語が、働きかけている主体として呈示されていれば、(その行為がそれ自身の内部に対象を有しているように、他のある対象に及ぶものであろうと)、そこには、能動態をその言語的表現とする事態が存し」、また「もし、主語が、己の外にある動作主から発した行為を蒙っているものとして呈示されていれば、そのような事態は受動態によって表現される」 (§358, p. 194)。

24. Il *marchait* en silence.

25. La marchande *vendait* des noisettes.

26. Il *a été battu* (par ses camarades).

もっとも普通に見られるこのような定義によれば、「能動態」との対立において捉えられた「受動態」の本質は、場の非閉鎖性を前提とした上での、行為の論理的廻行性、あるいは、逆進的他動性の言語化ということになるであろう。

そして、「受動態」が、このように、場の非閉鎖性を前提としたものである以上、たとえ「受動的」であれ、「代名動詞」であるものと「受動態」との差は、それぞれの「一次的機能」の差であり、両者が接近しうることがあるとしても、それは、文意の論理的帰結においてにすぎないであろう。

従って、受動的代名動詞の分析とは——必要に依じて受動態と比較すること



はありえても——代名動詞の一つの「価値」、その「内的能動性」という「価値」の主要なものからさらに派生しうる「価値」を分析することに外ならない。(もちろん、このことは、「価値」あるいは文体的ニュアンスを軽視することではない。STEN-b が正しく指摘している (p. 95) ように、「微妙なニュアンス (subtilités) を無視した、各国言語の研究というものはいない」からである。)

しかし、BRUNOT-BRUNEAU にあっては、「代名形は受動形の単なる代用物に化しており」 (§ 276, p. 275)、DAUZAT にとつても、「なにがしかのニュアンスの差を除けば、受動態と同一の価値」を有するにすぎない。そして、WARTBURG-ZUMTHOR が、「誤って、しばしば、受動態と混同されてはいる」が、「現代の用法においては、真の受動態ではない」 (§ 354, p. 192) と如上の説を批判していても、それは、彼らにとっては、「受動文とは、本質的に、行為を示す文であり」、明示的にせよ、暗示的にせよ、「動作主」が介入してこない限り「その文は受動態ではない」 (§ 385, p. 195) のに、「現代の用法にあっては」、受動的代名動詞は「動作主補語」を伴わないのが常態であるという、もっぱら、形態的理由によってであるにすぎない。

一方、WAGNER-PINCHON は、27. a. —28. b. のような「若干の場合には、受動態の使用と能動的代名形の使用との間には、識別しうるいかなるニュアンスの差も存しない」 (§ 326, p. 293) とする。

27. a. Le noir *était* très porté cet hiver.  
 b. Le noir *se portait* beaucoup cet hiver.  
 28. a. Cette pièce *est jouée* partout.  
 b. Cette pièce *se joue* partout.

しかし、これら「若干の場合」においてさえ、ニュアンスの差、あるいは、「価値」の差は明瞭に存在する。「いささかの差もない」としうるのは、文意の論理的帰結のみに拠る時だけであろう。そしてその「価値」の差を要約すれば、27. a. —28. b. における a 群も b 群も、それぞれの、「この冬は黒が大いに流行したよ」「この芝居はいたるところで演じられている」という文意の論理的同一性にもかかわらず、その時の現実の一つの属性としての同一の事態が、後者にあっては、その「動態」——「運動」であり「生成」であるもの——において捉えられているのに、前者はこれを、純粹に「静態」として捉えていることである。

このことは同時に、受動態の本質乃至「一次的機能」を、「受動文とは本質的に行為を示す文である」とする考え方、換言すれば、受動態を、非閉鎖的な場を前提とした事態の因果関係の逆転、行為の方向運動の廻行性の言語化であるとする考え方の修正を要求する。受動態の本質は、行為のある方向運動——コンテキストが許せば、それもまた、その「価値」の一つになりうるとしても——以外のところにこれを求めなければならないであろう。

そして、MEILLET の次のような指摘は事の本質に迫っているように思われる。「もし受動態が能動態の単なる裏返しにすぎないならば、それは、畢竟、有っても無くてもよいものでしかないであろう。受動態の真の效用は、事行を、ある動作主の介入の結果生じているものとして呈示するのではなく、事行を、いかなる無縁な観念をもこれに加えずに、ただそれ自体として呈示することにある。受動態に添えて動作主が示される場合も、それは行為の起点としてであって、本来の意味での動作主としてではない。たとえば、ラテン語の *occiditur a Marco*、即ち、*il est tué par Marc* は、本質的には、*il est tué* を示し、その起点が *Marcus* であることを教えているのである」(p. 196)。

MEILLET のこの指摘に拠って受動態を定義し直せば、受動態とは、「個体」が抱いている「己が現に、人間や事物の影響を蒙っているという感情」(DE BOER, § 100, p. 66) という精神の様態の言語化であり、その本質は、完了したある行為の結果としての状態を、その時の現実に話者が与えうる一つの属性として呈示することにある。——ある行為の純粹観念を「完了」のアスペクトで呈示する「過去分詞」を、その時の現在の状態を「いかなる無縁な観念をもこれに加えずに」靜態的に示す *être* に結びつけているという統辭的構造は、それを示しているのである。

「動作主補語」は、そのような「現在」の属性の「起点」、あるいは、発生因を示すものにすぎず、必要に応じて——たとえば、「起点」、正しくはむしろ、機縁を明示し、同時に、それによって、ある方向運動の暗示という「価値」を与えようとする時——「添えられる」ものにすぎないのである。

このことはまた、フランス語において、精神乃至感情の様態としての「受動態」は、ほとんど、対応する固有の言語形式を有していないことをも意味している。従って、ある言語形式のなかに実現されたと考えうる時でも、「受動態」は、本質的に、「価値」でしかありえないのである。代名動詞の本質を、*champ d'action clos marqué + activité intérieure* と公式化したのに倣って、コンテキストが時に応じて実現する受動態の本質を公式化すれば、*champ*

d'action non-clos+état-attribut (+point de départ) ということになるであろう。

残された問題は、第一に、ある現実の認識に際しての、このように相異なる精神の様態の言語化である受動態と代名動詞とが、「若干の場合」にせよ、文意の論理的同一性を獲得しうるためのコンテクステュエルな条件の分析である。

第一の条件は、たとえそれ自体としては不安定な分類枠 (cf. OLSSON, pp. 31-39) ではあっても、動詞の意味的性質が「完了動詞」(verbes perfectifs)——「固定した終止点を有する動詞 [ouvrir]」(OLSSON, p. 39)——であるか、「未完了動詞」(verbes imperfectifs)——「固定した終止点を有しない動詞 [jouer]」(ibid., ibid.)——であるかであり、第二は、いかなる補語を伴うかであり、第三は、動詞がいかなる時制におかれているかである。

WAGNER-PINCHON の例に即して言えば、28. a / b の間に、文意の論理的同一性が成立するのは、第一に、動詞が「未完了動詞」(jouer) であり、第二に、行為の反復を可能にする補語 (partout) があるからである。そして、この補語を省くだけでも、動詞は依然として「未完了動詞」であり、時制も同一であるのに、文意の論理的同一性の成立は、ほとんど不可能になる。

29. a. Cette pièce est jouée.  
b. Cette pièce se joue.

なぜならば、est jouée は、これを est en train d'être jouée とも、(そして、本質的には、むしろ、) a été jouée (の結果としての現状) とも解しうるのに、se joue は、この形態の本質上、常に、前者の意味でしかありえないからである。

そしてもし、動詞が「完了動詞」ならば、論理的意味の差は明瞭なものとなる。

30. a. La porte est (sera, était) ouverte.  
b. La porte s'ouvre (s'ouvrira, s'ouvrirait).

なぜならば、30. a. におけるように、動詞が「完了動詞」で、かつ、「行為主がとりたてて示されておらず、être が、現在、未来、あるいは、半過去におかれていれば、ただ結果のみが、動詞 être の示している時間と同時的になる」(GOUGENHEIM, p. 222) からである。

しかしまた、もし時制が、次の諸例におけるように、過去に生じた事態の、

程度の差こそあれ、抽象的な報告を本質とする (cf. III, アスペクト) ものであれば、「完了動詞」であれ、「未完了動詞」であれ、文意の論理的同一性は復活する。こうした時制にあっては、「完了! / 未完了」という、語彙のレベルでのアスペクトの対立は捨象され、事態は過去のなかの一「点」として捉えられることになるからである。

31. a. Le noir *a été* (*fut*) très *porté* cet hiver.  
 b. Le noir *s'est porté* (*se porta*) beaucoup cet hiver.  
 32. a. La porte *a été* (*fut*) *ouverte*.  
 b. La porte *s'est ouverte* (*s'ouvrit*).

残されている第二の問題として、文法書が一般に教えている「受動的代名動詞」の使用上の制限である、1) 主語は「ほとんど 3 人称に限られる」こと、2) 主語は、「時として人でありうる」が、物が常態であること、3) 「動作主補語を伴わない」ことという制約 (cf. GREVISSE, § 1392, p. 696) がある。

第一の、主語の人称が、「ほとんど」、3 人称に限られるという指摘は、「争点をなしている事例」(GREVISSE, § 139, n. 34, p. 696) とされる *je me nomme* (Pierre), *tu l'appelles* (Bertrand) のためである。これは、WARTBURG-ZUMTHOR によれば、「誤って、しばしば、受動態と同義とされている」 (§ 354, p. 192) 事例に含まれ、BRUNOT によれば、「例外的に用いられた」非 3 人称の「受動的代名動詞である」(p. 369)。

しかし、すでに見てきたように、畢竟、「受動的」代名動詞もまた、「代名動詞」以外ではありえない以上、ここに「争点」を見出す理由は存しない。*je m'appelle Pierre* であれ、*cette fleur s'appelle tulipe* であれ、*s'appeler* が *avoir pour nom* という論理的意味に到達するプロセスには、いかなる差もありえないからである。

第二の、主語は「時として」しか人でありえないという制約もまた、本質的な意義を有しえない。GOUGENHEIM が、*il s'est tué en automobile, il s'est noyé* について語ったことを想起すれば足りるのであって、たとえば誰かの死が、再帰的他動性にもっとも近づく意志的な「自殺」(33) であれ、抗いがたいものに抗いつつ迎えざるをえなかった「事故死」(34 > 35 > 36) であれ、これを要するに、主語が、程度の深淺こそあれ、発生した事態と内面的にかかわっていれば、それに伴う「内的能動性」の故に、代名動詞は、そのもっとも適切な言語化になりうるのである。

33. Mourir est passivité, mais *se tuer* est acte. (MALRAUX, *Petit Robert*)  
 34. Il *s'est tué* au volant de sa voiture.  
 35. Un alpiniste *s'est tué* en montagne.  
 36. Il *s'est tué* en avion.

第三の、「動作主補語」を伴わないという制約は、制約というよりは、むしろ、代名動詞の本質からする自然な結果である。

なぜならば、「動作主補語」とは、すぐれて論理的な概念であり、受動態を行為の方向運動の論理的遡行と捉える時の必要条件だからである。事実、GREVISSE は、これを「行為の動因 (cause efficiente)、即ち、それによって行為が成就された生物 (être) や物体 (objet)」 (§ 320, p. 194) と定義している。従って、「受動的」であるにせよ、「代名動詞」であるものが、このように、外在的、論理的なものと規定される「動作主補語」と相容れないのは、事の自然な結果なのである。代名動詞にあっては、行為は場の閉鎖性を前提とした、内発的、自律的な運動であり、生成である以上、「動作主」乃至「動因」の内外二重の併立は、「思考の論理」にとって明白な矛盾を構成する。37, 38 (GREVISSE, § 1392, n. 32, p. 696) が、文意の論理的同一性を構成しえないのは当然なのである。

37. *On jette à l'eau le coupable.*

38. *Le coupable se jette à l'eau.*

さらに、「動作主補語」は、論理的概念の常として、定義においては明快でありえても、現実にとえられたあるコンテキストのなかでのその同定にはしばしば困難を伴う。MEILLET がこれを、むしろ、「行為の起点」であって「本来の意味での動作主ではない」と考え、そこから、受動態の本質を、「事行を、いかなる無縁の観念をもこれに加えずに、ただそれ自体として呈示する」ものと考えたのもそのためであったと思われる。

「動作主補語」の同定に伴うこの困難を切り抜ける手段として、一般に採られているのは、「受動態の動作主補語は、前置詞 *par* または *de* のいずれかによってみちびかれる」 (GREVISSE, § 321, p. 194) という形式的乃至形態的処理である。それでもなお、人は、「しかしまた、前置詞 *à* にみちびかれる動作主補語を用いて」39 のようにも「言う」 (GREVISSE, *ibid.* n. 25) とし、さらに、「固定した語法」 (ex. *pour raison à moi connue*) を除いては、「*à* にみちびかれる動作主補語は例外である」 (*ibid.*, *ibid.*) と言わなければならないのである。

である。

39. *Cette fourrure est mangée aux vers.* (Ac.)

しかし、すでに述べたように、「動作主補語」の本質は、現に在る事態の「起点」——より正しくは、それを誘発した、さらに広義の機縁——であると考えられる。従って代名動詞は、思考の論理が直接的な「動因」と解しうる「動作主補語」はこれを拒否しても、たとえ外在的であれ、内発的、自律的に、それ自身で運動し、生成している事態の機縁である限り、これを拒むことはないのである。

事実、DE BOER は、「動作主が示されれば、事は直ちに受動態にかかわったものとなる」としながらも、「しかし、忘れてはならないのは、*la porte s'ouvre par le vent* において、*par le vent* という表現を、単に、手段の補語と解することもできるということであり、その場合には、*s'ouvrir* は中間態である」 (§ 100, p. 67) としているし、SAUVAGEOT は、40 を引用しながら、「なるほどこの場合、風によって扉が開かれたという意味にはなるが、話者は、扉がひとりでに開いたという感じを抱いたのである」 (p. 175) としている。

40. *La porte s'est ouverte sous l'effet du vent.*

41. *Son cœur s'ouvre aux premiers feux de l'amour.* (Rouss., *Petit Robert*)

要するに、思考の論理にとって「起点」乃至機縁と解しうるものであれば、それで足りるのであって、前置詞が「*de* または *par* のいずれか」であるか、あるいは、それ以外であるかというような形態的な要素はさしたる意味を有しないのである (cf. *se tuer au travail, de travail*)。

結局、物を主語とする受動的代名動詞の「価値」は、受動態との比較においてよりは、物を主語としている時、そこに見られるアニミズム的発想の問題として捉えられるべきものとなる。

事実、受動的代名動詞のアニミズム的陰翳はしばしば指摘される。DAUZAT は、「*la maison se bâtit* は、その表現のなかに、アニミズム的余映をとどめている」 (p. 204) とし、GOUGENHEIM は、「主語が物の名詞である時でさえ、ある種の能動性は想定されている」として、42 において、「扉が開くという事態を惹き起しているのは、言うまでもなく、門番によって操作された戸引綱によってではあるが、人は、扉が行動しているという感情を抱いているのであ

る」(p. 226) としている。

42. Le descendis l'escalier, je demandai le cordon, la porte *s'ouvrit*, je sautai dans la rue. (B. CONSTANT)

そして、次のようなコンテキストにおいては、人は、いっそう容易に、「アニミズム」を感じとることができよう。

43. Ce livre *se lit* facilement.  
 44. Ce petit vin *se boit* tout seul.  
 45. On a du papier qui *s'écrit* facilement.

GOUGENHEIM はさらに、「こうした種類のアニミズムは、フランス語においては、ひとりこの場合に限らない。独特な発想によって、事物に意志が与えられている例として、Ceci *veut être* expliqué. (V. HUGO)、あるいは、Cette viande *demande à être* mangée bien chaude のようなものがある」(ibid.) とも言っている。le malheur (la légende) *veut que*... という言い方も、このカテゴリーに入るであろう。

そして、VINAY-DARBELNET は、「事件やその展開の場 (cadre) を示す際に、思考する主体を介入させる、換言すれば、事物を一個の主語として扱うというフランス語の傾向は、A. MALBLANC に倣って言えば、これを『主観主義』と呼ぶことができる。英語もドイツ語も、もっと、客観的であって、そこでは、フランス語にくらべてずっと頻繁に、現に在るもの、現に生じているものが、現実に対する主観的解釈を抜きにして表現される」 (§ 187, p. 205) として、46-49 のような例を挙げ、また、こうした「主観主義は、類似の論理的プロセスによって、アニミズムに結びつく」(ibid.) として、50-53 のような例を示している。

46. On frappe à la porte.  
 47. *There's a knock at the door.*  
 48. Nous sommes jeudi aujourd'hui.  
 49. *To-day is Thursday.*  
 50. Le mont... *se peint* sur le ciel... (E. RECLUS)  
 51. *The mountain... stands out against the sky.*  
 52. Sur ses contours *se dessine* une auréole jaune. (X. MARMIER)  
 53. *Around its edges a yellow halo becomes visible.*

主語が物である時、その主語を、閉鎖的な場に生じた内発的、自律的な運動乃至生成である事態の主体としている代名動詞にとって、このようなアニミズム的陰翳は、当然乃至自然な、派生的「価値」である。

### III. アスペクト

代名動詞はまた、しばしば、そのアスペクトについても語られる。

そして、たとえば、WAGNER-PINCHON にとっては、これもまた、代名動詞のすべてに通ずる「一次的機能」の発見を断念せざるをえない理由の一つである。なぜならば、彼らにあっては、「習慣 (*C'est une chose qui se fait*) や、持続 (*La maison se construit*) や、単にそれとして示された事行 (*Je me lave, il se rase*) をあらわすために用いられる代名動詞相互の間には、いかなる血縁関係も存しない」 (§ 328, p. 295) と考えられているからである。(しかし、ここで、*je me lave, il se rase* を、このほとんど語彙のレベルにとどまるコンテキストのなかで、「単にそれとして示された事行」とすることには、明らかな無理があるであろう。)

しかし、CRESSOT は、「人は、*les abeilles essaient* とも言うが、代名動詞の属性の一つである持続のニュアンスを持たせて、*les abeilles s'essaient* とも言う」(p. 155) とし、さらに、*je coupe / je me coupe* とのアナロジーによって生じたこの代名形化が、*essaimer* の他動詞としての用法を生ぜしめたこと、換言すれば、いずれも「自動詞」としての *essaimer / s'essaimer* の間にあるものは、純粹に、アスペクトの対立であることを指摘する (ibid.)。

また、BALLY は、「さらに興味深い事実として、一連の動詞においては、再帰代名詞の有無が、アスペクトにかかわり (*aspectif*)、かつ、法にかかわる (*modal*) 差を象徴する。その際、自動詞は、そこに意志が欠けている状態 (たとえば、*un corps plonge dans l'eau*) を、そして、再帰形は、その発端において捉えられた意志的行為 (*se plonger dans l'eau*、同様に、*le blé lève / je me lève*) をあらわす。同じカテゴリーに属するものとして、(*se*) *tremper*, (*se*) *remuer*, (*se*) *loger*, (*se*) *plier*, (*se*) *coucher*, (*s'*) *approcher*, (*s'*) *avancer*, (*se*) *reculer*, (*se*) *pendre*, (*s'*) *enlaidir*, (*s'*) *embellir* がある」 (§ 518, p. 314) としている。

そして、DAUZAT もまた、所謂「本質的代名詞」に触れつつ、「注意すべきことは、単純形動詞と再帰的複合形との間のニュアンスの差であり、たとえば、



*fuir* (抽象的行為) と、『現に行動し、努力し、逃れようと考え、それに心せか  
れている主語を表現している』*s'enfuir*、——また、*dormir* (状態) と *s'endormir*  
(状態への移行) がそれである」(p. 204) とし、GOUGENHEIM (p. 226) にも同  
じ指摘が見られる。

BALLY が、「再帰代名詞の有無」が示す「アスペクトにかかわり、かつ、法  
にかかわる差異」としていることから知られるように、ここでの「発端」と  
「意志」とは深く結びついている。さらに言えば、ここでの「発端」は「意志」  
から派生する。ある事態が、「抽象的」、知的な事実認識 (*plonger, fuir, dormir*)  
としてではなく、明示された閉鎖的な場の内部に生じている運動乃至生成とし  
て、換言すれば、前者の静に対立する動として捉えられている時、そこに——  
事態のアミズムのな把握をも含めて——ある「意志」の発現を見ることは自  
然な言語感情であり、一方、「意志」の発現はその「発端」において察知される  
のが常である——たとえば、*il voulut parler* は、「話したいという意志を抱い  
た」であるばかりでなく、「話を切り出し(かけ)た」でもありうるのである。

そしてもちろん、*s'endormir, s'en aller* という型の動詞にはあっては、空  
間的「起点」を示す *en* が——また、*s'écrier, se récrier* のような型の動詞に  
あっては、*é, ré-* という同義の接頭語が——「癒着」していることによつて、  
「発端」のアスペクトはそれ自体として有標化されている。しかしここでもま  
た、事態を抽象的、静態的に捉えている単純形 (*dormir, fuir, aller son  
chemin=partir*)、同一の事態を、意志的、動態的に捉える代名形 (*s'endormir,  
s'enfuir, s'en aller=partir*) というアスペクトの基本的対立関係は変って  
いない。

このように、「意志」との関連で捉えられる「発端」のアスペクトは、代名動  
詞という、場の閉鎖性と内的能動性の有標形がそれのみで持ちうる、言わば、  
その固有のアスペクトであるのに対立して、WAGNER-PINCHON や CRESSOT  
が指摘する「持続」の——そして、それとの関連で捉えられる、より派生的な  
「発端」の——アスペクトは、代名動詞に固有のものではない。

それは、いかにも不安定で相対的な区分にもせよ、完全に無視することもで  
きない「完了動詞」と「未完了動詞」という、動詞の語彙レベルでのアスペク  
ト、時の補語が時「点」を示すか、時「間」を示すかというその意味的性質、  
そして、もっとも重要な条件としての、動詞の時制の含むアスペクトという複  
数の要素が交錯し、相関し合うところに成立する。

54. On trouva (a trouvé) / *trouvait* la solution.  
 55. On s'arrêta (s'est arrêté) / *s'arrêtait*.  
 56. On chercha (a cherché) / *cherchait* la solution.  
 57. On se trouva (s'est trouvé) / *se trouvait* devant la maison.

言うまでもなく、ここでのアスペクトの基本的対立関係は、STEN-b が「点としてよりはむしろ」|—|という図式化を行っている単純過去——「始まり、展開し（ただし、この局面は関心の外にある）、終局に達した過去の行為」を「客観的に確認する」（p. 97）時制——と、同じ STEN-b が、(|—) — (—|) と図式化している半過去——「単純過去のアスペクトで行為を捉えている時には、言わば、その存在を認められていなかった中間の局面を唯一意味あるものとしている」（*ibid.*）時制——との対立から生じている。そして、単純過去を複合過去に変えても、この基本的対立関係は変わらない。この場合に変るのは、知的にはひとしく「過去」であるものに対する話者の時間意識の差という、より派生的な「価値」である。単純過去は、過去のある事態を、「己の現在」とは絶縁された「歴史として過去」のなかに「点」として捉えている精神乃至感情の様態の言語的反映であり、一方、複合過去は、同じ過去の事態を、「己の現在」の等質、連続的な延長上にある「己の過去」として、「体験の記憶」として「点」化する。

従って、54-57 においても、「持続」のアスペクトは、用いられているのが半過去ならば、「過去において在った」事態の「持続的追体験」を示すこの時制に、すでに、そして分ちがたく含まれている「価値」であって、代名形化されることによって、始めて生じるものではないことは明瞭である。従ってまた、このアスペクトについて、CRESSOT が、*les abeilles essaient/les abeilles s'essaient* という対立関係を樹て、後者には「持続」のアスペクトがあるとし、かつ、それは「代名動詞の属性の一つである」としていても、真実は、「持続」のアスペクトの有／無ではなく、その度合の差にすぎない。代名形は、「場の閉鎖性の有標化+内的能動性」というその本質によって、現在という時制が、すでに暗示している同じアスペクトを、いっそう——ほとんど明示的なまでに——強めているにすぎないのである。

そして、本来、時制の含むアスペクトとの関連で考察されなければならない、より派生的な「発端」のアスペクトについて、たとえば、単純過去の暗示する「発端」のアスペクトについて言えば、STEN-b が正しく指摘しているとおおり、「たとえ、行為の開始点に力点がおかれていようと、そのことは、『残り』の実

現が無視されているということではなく、始まり+残り、と考えられる」(p. 101)——さらに正確に言えば、「始まり(+残り)」であろう。

そしてまた、このような「発端」のアスペクトが成立するためには、明示的にせよ——たとえば、時「点」の補語の存在——、暗示的にせよ、開始点が示されていること、および、動詞が本来「未完了動詞」であること、即ち、いったんある事態が始まれば、原理的には、それが無限に継続しうることが要件となる。時制としては、単純過去がもっともふさわしいが——さらに派生的な「価値」の問題を措くとすれば——複合過去でも、単純未来でも、また、現在でもありうる。

58. Les Allemands *occupa* (a *occupé*, *occupera*, *occupe*) la France deux ans plus tard.
59. (Alors) on *chercha* (a *cherché*, *cherchera*, *cherche*) la solution.
60. (Alors) il *se tut* (*s'est tu*, *se taira*, *se tait*).

また、同じく「未完了動詞」でも、avoir, être ならば、ひとしく「発端」に力点があるとは言え、「残り」もより優勢になり、ほとんど、「始まり+残り」となるであろう——être では、特に強くそれが感じられる。ここで、原則的には、現在が、また、être では、常に複合過去が排除されることは、「コンテキストを解釈する思考の論理」の当然な要求である。

61. (Une semaine plus tard,) elle *eut* (a *eu*, *aura*) vingt ans.
62. Le soir même, elle *fut* (*sera*) à Paris.

そしてもちろん、もし、補語が開始及び終止の時間的境界を明示あるいは暗示していれば、同種の動詞、同一の時制のままで、「発端」のアスペクトは消滅し、示されているものは「始まり(+中間)+終り」を、言わば、一「点」に縮約した、事態の全体像となる。しかし、STEN-b は、たとえば、65の単純過去を例に引きつつ、ここでも、「始まり+残り」があるとす。時「間」の補語を、暗示された「残り」の継続期間としているのである——「彼女は黙り込んだ、そしてそれは東の間続いた」。それもまた、ある「思考の論理」にとっては、十分可能な解釈であろう。

63. Les Allemands *occupa* (a *occupé*, *occupera*, *occupe*) la France pendant des Années.
64. (Longtemps) on *chercha* (a *cherché*, *cherchera*, *cherche*) la solution.
65. Elle *se tut* (*s'est tu*, *se taira*, *se tait*) un instant.

従って、「持続」に比してさらに派生的な「価値」である「発端」や、さらには、同じく派生的な「価値」としての「終止点」のAspect (il *dina vite* = il *acheva vite de dîner*, STEN-b, p. 101) は、それ自体としては、代名動詞そのものの「属性」ではありえず、「持続」の場合と同じく、単に度合の強弱であり、代名動詞にあっては、その「内的能動性」によって、より強く暗示されるものでしかない。

## 結 語

現行の分析は、代名動詞の本質を、論理的再帰性乃至再帰的他動性に求め、代名動詞という同一の複合的動詞形態において、その代名詞部分は、一方の事例にあっては、基底動詞の(直接あるいは間接)目的語であり、他方にあっては、「機能ゼロ」の「屈折小辞」乃至「形態素」であるとす。

われわれは、この分断的二分法に、その方法論の本質における誤謬があると認めて、これを捨てた。なぜならば、DE BOER が正しく指摘しているように、「すべての統辞的要素には、そのみが、常に、コンテキストのいかにかわらず果している機能」——その「一次的機能」(*fonction primaire*) がなければならず、また、DAUZAT も言うように、「用いられるべくして用いられたいかなる小辞も虚辞ではありえない」と考えられるからである。そしてまた、かつてのフランス語において、代名形が、他動性の「再帰化」と、広く話者の「関心」、心理的関与を示す「心性的与格」(*datif éthique*) の派生的使用の併立、合流であったとしても、このような「歴史」は、「今日の言語の正しい現実に合致した枠を提供できるものではない」(BRUNOT) からであり、DE BOER もまた、「一次的機能」は、あくまでも、「ある特定の時代の用法」としてしかこれを求めないとしているからである。

われわれは、現代フランス語という「ある特定の時代」における代名動詞の本質乃至「一次的機能」を、「内的能動性」をその分ちがたい「価値」——たとえば時制におけるAspect——とした「行為の場の閉鎖性」の有標化のなかに求めた。「行為の場の閉鎖性」とは、これに言葉を与えれば、DE BOER の言う「中間態」——現実とかかわる「個体」の精神乃至感情の様態 (*modalité*) の一つとしての、事態を「どこまでも己の身に限られているか、あるいは己を取り巻く周囲と密接に関係しているある変化」と捉える体験的感情——に相当するものであるが、DE BOER の言うように、代名動詞もその言語化の一部でありうるのではなく、中間態のすべてが代名動詞のなかにあるわけではない。

(le blé lève) としても、代名動詞のすべては中間態のなかにあるのでなければならぬ。また、CRESSOT に示唆をえた「内的能動性」とは、「受動」に対立する「能動」の、ある在り方としてではなく、場の閉鎖性の上に成り立っている事態が、必然的に具えている属性としての「動態」(dynamisme)——内発的で、自律的な「運動」であり「生成」であるものと解されなければならない。

そして、ひとしく、閉鎖的な場の内部にとどまる限り、換言すれば、ひとしく、代名動詞であるままで、事態は、己の存在とその外なるものとの接点にも位置しうる (se laver) し、反対に、どのようにでも深く己自身の内部に及びうる (se laver < se promener < se tromper < se souvenir < se mourir)。

従って、ある事態は、現行一般の分析とは反対に、その「内的能動性」が再帰的他動性に近づくほど、それだけ非閉鎖的な場に接近し、その意味で、代名動詞としての限界事例乃至周辺事例に近くなり (se laver < se lever)、「相互的代名動詞」(se battre l'un l'autre) に至って、たとえば s'acheter une voiture のような事例とともに、閉鎖的な場と非閉鎖的な場との境界領域を埋める過渡的事例——それなくしては、いかなる統辞法も存立しえない事例 (DE BOER) ——を構成し、本質的かつ実質的に、「疑似代名動詞」(pseudo-promominaux) と呼ぶにふさわしいものとなる。

そして、一般に、独立した分類枠を与えられ、そこでの代名詞が、たとえば GREVISSE によっては、「分析不可能な形態素」とされる (§ 1392, p. 696) 「受動的代名詞」の「受動性」なるものもまた、代名動詞の本質から当然に生じうる「価値」でしかなく、かつ、この「価値」は、「受動態」——フランス語においては、それ自身に固有の言語形式を持たず、コンテクストの所産としての「価値」として暗示されうるにすぎないもの——との比較においてではなく、フランス語の特徴の一つをなすと見られているアニミズム的発想のもたらすものとして捉えられるべきものとなる。

そしてまた、代名動詞について、しばしば語られるアスペクトは、代名動詞の本質に由来する、それに固有なものとしてのアスペクト——BALLY が、plonger / se plonger に見ているような「意志的行為の発端」——と、代名動詞であるか否かにかかわりなく、「完了動詞」、「未完了動詞」という語彙のレベルでの動詞の意味的性質、時の補語の意味的性質、さらに、そしてとりわけ、時制が本来的に含むアスペクトなどの複数の他の要素が相関し合うところに生じる「持続」や「発端」のアスペクトとに分けて考えられなければならない。

こうしたわれわれの試論は、「一次的機能」——「文法的」価値——と二次的

な「価値」(valeurs)——「コンテクストとそれを解釈する思考の論理」によって暗示されるにすぎない、「文体的」価値——とを区別することなしには、ある統辞的要素の本質は発見しえないという (DE BOER) 方法論的原理に拠っているが、同時に、たとえ「根柢から懐疑的にならざるをえないほどに」、それぞれの理論が錯綜し、矛盾し合っている、「理論というものに絶望するには当たらない」。「個々の理論の集積のなかから、いつの日にか、他のすべての理論——隅から隅まで誤りを犯しているなどということはありませんであろう他のすべての理論——の総合をなしとげうるほどに、力に恵まれた精神によって抱懐され、呈示される *la théorie* が生れるであろう」(IMBS, p. 18) という、より重要な、そして常に、人を励ます原理にも拠っている。

## BIBLIOGRAPHIE

- BALLY: CH. BALLY, *Linguistique générale et Linguistique française*, 4<sup>e</sup> éd., revue et corrigée, Berne, Francke, 1965.
- BONNARD: H. BONNARD, *Grammaire française des Lycées et Collèges*, Paris, S.U.D.E.L., 1950.
- BRUNOT: F. BRUNOT, *La Pensée et la Langue*, 3<sup>e</sup> éd., revue, Paris, Masson, 1953.
- BRUNOT-BRUNEAU: F. BRUNOT & CH. BRUNEAU, *Précis de grammaire historique de la langue française*, Paris, Masson, 1969.
- CRESSOT: M. CRESSOT, *Le style et ses techniques*, 8<sup>e</sup> éd. mise à jour par L. JAMES, Paris, P.U.F., 1974.
- DAUZAT: A. DAUZAT, *Grammaire raisonnée de la Langue française*, 2<sup>e</sup> éd. revue et augmentée, Lyon, I.A.C., 1948.
- DE BOER: C. DE BOER, *Syntaxe du Français Moderne*, 2<sup>e</sup> éd. entièrement revue, Leiden, U.P.L., 1954.
- FREI: H. FREI, *La grammaire des fautes*, 1929, Genève, Slatkine reprints, 1971.
- GOUGENHEIM: G. GOUGENHEIM, *Système grammatical de la Langue française*, Nouveau tirage, Paris, d'Artrey, 1969.
- GREVISSE: M. GREVISSE, *Le Bon Usage, Grammaire française avec des remarques sur la langue d'aujourd'hui*, 11<sup>e</sup> éd. revue, Paris-Genbloux, Duculot, 1980.
- Grammaire Larousse du XX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Larousse, 1936.
- IMBS: P. IMBS, *Le subjonctif en français moderne*, Publication de la Faculté des Lettres de Strasbourg, 1953.
- MAUGER: G. MAUGER, *Grammaire pratique du français d'aujourd'hui*, 4<sup>e</sup> éd., Paris, Hachette, 1968.
- MEILLET: A. MEILLET, *Linguistique historique et Linguistique générale*, t. I, Paris, Champion, 1921, Nouveau tirage, 1975.
- MOIGNET: G. MOIGNET, *Sur la "transitivité indirecte" en français* in *Travaux de linguistique et de littérature*, XII, Paris, Klincksieck, 1974, pp. 281-299.
- OLSSON: L. OLSSON, *Etude sur l'emploi des temps dans les propositions introduites par QUAND et LORSQUE et dans les propositions qui les complètent en*

- français contemporain*, Stockholm, Uppsalia, 1971.
- SAUVAGEOT: A. SAUVAGEOT, *Les procédés expressifs du français contemporain*, Paris, Klincksieck, 1957.
- STEN-a: H. STEN, "Réfléchi et réfléchi" in *Mélanges Grevisse*, Paris-Gembloux, Duculot, 1966, pp. 323-326.
- STEN-b: H. STEN, *Les temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, 2<sup>e</sup> éd., Copenhagen, Munksgaard, 1964.
- VINAY-DARBELNET: J.P. VINAY & J. DARBELNET, *Stylistique comparée du Français et de l'Anglais*, Nouvelle éd. revue et corrigée, Paris, Didier, 1977.
- WAGNER-PINCHON: R.-L. WAGNER & J. PINCHON, *Grammaire du français classique et moderne*, éd. revue et corrigé, Paris, Hachette, 1974.
- WARTBURG-ZUMTHOR: W. VON WARTBURG & P. ZUMTHOR, *Précis de Syntaxe du Français contemporain*, 3<sup>e</sup> éd., Berne, Francke, 1973